# 学習のPDCAをノートに記録して自らの学修状況・成績を評価し、目標達成に向け自己調整する力を磨く

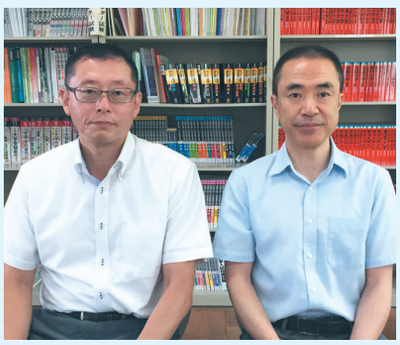
## 真岡高校（栃木・県立）

取材・文／笹原風花

### 学力向上と課題発見・解決への意識の涵養を1年次の柱に設定

学修状況評価に取り組むのは1年次。「まずは3年間を通して総合的な探究の時間でどのような力を育てたいのかを考え、流れをイメージしたうえで、学年ごとにどんな力をつけてほしいか、そのために何をすべきかに落とし込んでいった」と、一昨年度まで進路主事を務めた石塚政洋先生は振り返る。「真岡から世界を見つめ、未来を仲間と共に強く生き抜く力をもった生徒の育成」を3年間を通した大目標に据え、そのために必要な能力として「21世紀型能力（確かな学力、判断力・思考力・表現力、実践力）」を設定。1年次はこうした力を育成するための「推進期」と位置付け、基礎学力（特に英数国）の向上と課題発見・解決への意識の涵養を柱とした。1年次に身に付けた力を活かし、2年次（発展期）は自らの学問的興味・関心に基づきテーマを設定・探究する「テーマ研究」、3年次（充実期）は社会で自分を活かすための進路実現に向けた「論文発表」に取り組み、探究を深めていく。

「探究については、1年次からテーマ研究を行う学校も多いと思いますが、本校では自ら学び、探究するために不可欠な要素を育成することに主眼を置いています。具体的には、課題や目標は自分で設定し解決に向けて動かなければならないという意識や、自分の取組を振り返り、評価し、修正する力（メタ認知力）です。1年次にしっかりとこれらの意識や力を身に付け、2年次以降は自走してほしいというのが私たちの願いです」（吉柴豪直先生）



進路主事 吉柴豪直先生　　前進路主事 石塚政洋先生

### 学習のPDCAや成績の推移をノートに記録し、年度末に発表

これを実現するために独自に作成したのが、学習におけるPDCAを記録する「学修状況評価 活動記録ノート 至誠」だ（ツール1）。ノートの冒頭にある「はじめ

### 進路指導の課題とテーマ

今年で創立121周年を迎える伝統校。栃木県第三中学校として創立されるにあたり、真岡町（当時）が学校の敷地を買い上げて県に寄贈し、さらに地元有志からも寄附金が贈られるなど、地域から熱望され開校された歴史がある。創立以来、「至誠（人を欺かず、己を欺かず、自己の良心を尊び、善と信じることは必ず実行する）」を教育の基本精神に掲げ、地域を代表する男子校として質実剛健・文武両道の気風を継承している。

進路指導については、大学進学を念頭に置き、大学で専門性の高い学問を学ぶための基礎構築を意識して教科・科目の授業内容を編成。1年次より大学受験を見据えた指導を行ってきた。一方、近年は進学実績の低下、学力・学習意欲の差の拡大が課題となっており、教員へのアンケートからも「将来の展望や大学の志望理由が浅く、進路を安易に変えてしまう」「与えられた課題には取り組むが、自分で気づいて行動する主体性が育っていない」「自らの学修状況を客観的に評価し、修正するメタ認知力が弱い」といった生徒の傾向が明らかになった。そこで、自分はどうなりたいのか、そのためには何をすべきなのかを考え、意志をもって学習や活動に取り組む主体性を育て、メタ認知力を高めることを目的に、進路指導の新たな取組に着手。2017年には課題・探究学習推進委員会を立ち上げ、2018年度より総合的な探究の時間を使った「学修状況評価」がスタートした。

**進路状況**（2020年3月実績）　※全日制普通科

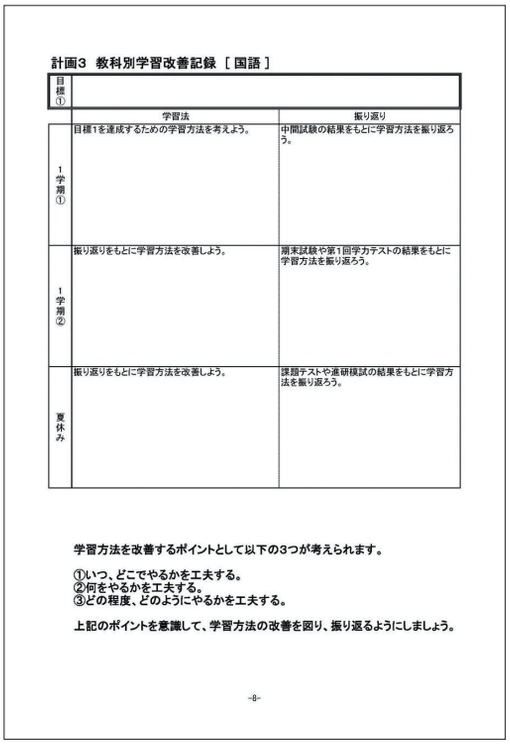
**大学進学177人（国立大54人・公立大12人・私立大111人）、専門学校進学1人、準大学など進学2人、その他17人**

ほぼ全員が4年制大学への進学を希望しており、2020年度入試の現役生進学率は89.3%。国立大学では地元の宇都宮大学への進学者が最も多い。

**School Data**

1900年創立/全日制普通科・定時制普通科/生徒数599人（男子のみ）※全日制普通科（定時制普通科は男女共学）

## ツール1　学修状況評価 活動記録ノート「至誠」（1年生版）　ダウンロード可



計画3　教科別学習改善記録［国語］

| 目標① | 学習法 | 振り返り |
|---|---|---|
| 1学期① | 目標1を達成するための学習方法を考えよう。 | 中間試験の結果をもとに学習方法を振り返ろう。 |
| 1学期② | 振り返りをもとに学習方法を改善しよう。 | 期末試験や第1回学力テストの結果をもとに学習方法を振り返ろう。 |
| 夏休み | 振り返りをもとに学習方法を改善しよう。 | 課題テストや進研模試の結果をもとに学習方法を振り返ろう。 |

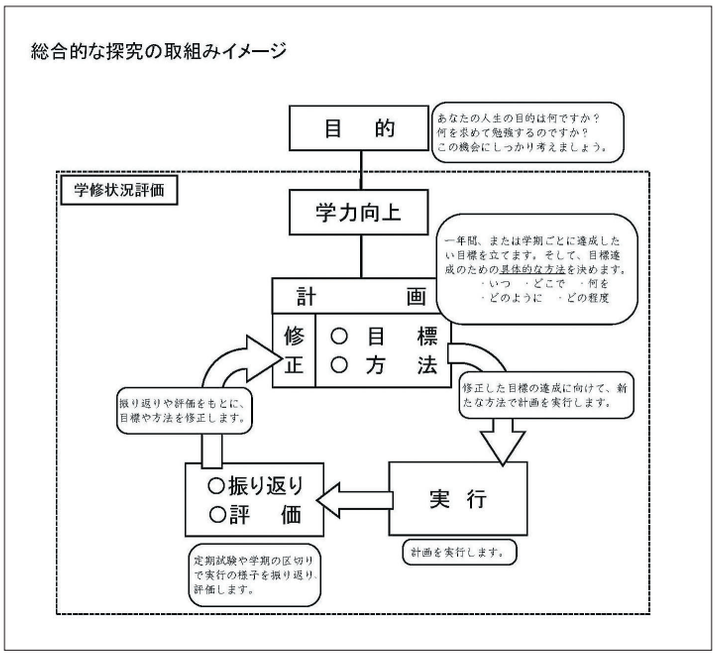
学習方法を改善するポイントとして以下の3つが考えられます。

①いつ、どこでやるかを工夫する。
②何をやるかを工夫する。
③どの程度、どのようにやるかを工夫する。

上記のポイントを意識して、学習方法の改善を図り、振り返るようにしましょう。

-8-

「教科別学習改善記録（英数国）」には、①教科ごとに目標を立て、それを達成するための学習法を考える、②定期試験などの結果をもとに学習法を振り返る、③振り返りをもとに学習法を改善する…というPDCAを記録する。




冊子の冒頭には、学修状況評価に取り組む意義が明記された「はじめに」、「LHR・総合的な探究　年間計画」、諸活動を通して身に付ける力と評価基準を明記した「真高8つの力と統一ルーブリック」、学修状況評価のPDCAを図示した「総合的な探究の取組みイメージ」（上）を掲載。生徒が学修状況評価の意義や目的、全体像を理解したうえで取り組めるよう工夫されている。

に」は、「君の人生の目的は何ですか」という問いかけで始まる。生徒は、人生の目的を考えたうえで学習目標（年間・学期）を設定し、その達成のために学習計画を立てる。そして、日々の学習内容や定期試験の結果を振り返り、客観的なデータを踏まえて自己評価する。さらに、より効果的に学力を高めるためにはどうすれば良いかを探り、うまくいっていないことは修正する。ノートには「目的（人生の目的・何を求めて勉強するか）」「目標（年間・学期）」「教科別学習改善記録（英数国）」「定期試験の勉強」「学習時間の記録」などの項目があり、生徒は年間を通して1冊のノートに記録を書き残していく。

4月（今年は休校の影響で6月）の最初の授業では、何のためにやるかという趣旨説明に時間を割く。「最初の意義付けが大事なので、何をするかどう書くかにとどまらず、この実践を通してどんな力を培ってほしいのかを明確に伝えることを意識している」と吉柴先生。最初はなんとなく書いている生徒も少なくないが、取り組むなかで次第に意味を理解していくという。ノートへの記入は基本的には個人で取り組むが、2学期には4人程度のグループで学び合う「グループ協議」の時間を数回設けている。勉強法を改善した点や工夫していることなどを情報交換することで、生徒は互いに気づきやヒントを得ていく。

そして、学年末の「学修状況評価発表週間」には、全員が1年間の総括として個人発表を行う（2019年度は休校のため実施なし）。もち時間は1人15分。学力や学習時間の推移がわかるデータなどを模造紙にまとめ、試行錯誤の軌跡や自分自身の変化・成長、取り組んだ感想などを、評価者を務める教員2名の前でプレゼンテーションする。ノートに記録した推移表をそのまま使う生徒もいれば、データを組み合わせてオリジナルのグラフを作る生徒や評価者用の手持ち資料まで準備する生徒などさまざまだ。評価者の講評は、後日、生徒にフィードバックされる。

「発表前は少し不安でしたが、実際は予想以上に質の高い発表が多く、頼もしく思いました。評価者のコメントも成績の推移だけでなく発表の良いところを評価したものが多く、多面的に見て評価してもらえるというのは生徒にとってもやりがいや自信につながったのではないかと思います」（石塚先生）

年間計画では個人発表で終わる予定だったが、教員からの要望があり、急遽、全体発表を行うことに（2018年度）。評価者や担任の推薦により選ばれた生徒2名が、学年全員が集まる修了式の場で発表を行った。

### 結果の背景まで語り合うことで生徒主体の質の高い面談を実現

「学修状況評価　活動記録ノート　至誠」を使った学修状況評価には、「隠れた目的がある」と石塚先生は言う。

「従来の面談は、どこの大学に行きたい・何がやりたいという生徒の進路希望の聞き取りに終始しがちだったため、面談をも


ダウンロード可　※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 発行メディアのご紹介 >> キャリアガイダンス（Vol.434）

っと踏み込んだ話をする場にしたいと思っていたんです。例えば、国語の勉強法がわからず苦戦している生徒に対して、国語の先生に相談できるようつないであげるなど、担任が生徒の学びのコーディネーターになればすごく良いし、生徒との信頼関係も深まるはずです。このノートを使って生徒と担任の先生とが絆を深めてほしい、先生たちにそういう経験をしてほしいというのが、裏の意図としてありました」（石塚先生）

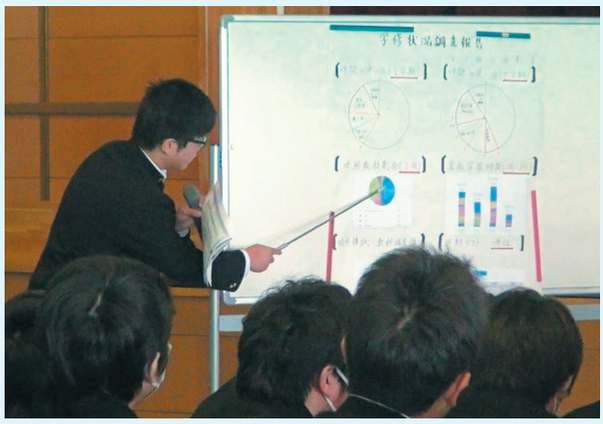
吉柴先生もこう続ける。

「定期テストごとに面談をしていますが、基本的には生徒の成績の推移と希望進路を基に話をしていて、毎回同じようなアドバイスになりがちでした。また、成績という結果の背景にある学習の習慣や方法はデータとして出てこないので、そこまで踏み込んだ話ができていませんでした。一方、このノートを活用し、生徒が自分で結果を評価し、課題を洗い出した状態で面談に臨めば、担任はそれに対して具体的なアドバイスができます。面談が発展的かつ生徒一人ひとりに対応したものになり得ると考えています」（吉柴先生）

## 勉強や学習法について安心して話せる空気が広がる

改善を重ねながら試行錯誤し、今年3年目を迎える学修状況評価。生徒へのアンケートでは、「勉強方法がわかった」「自分の学習を客観視できるようになった」「成長を実感できた」といった感想が多く寄せられている（資料1）。

「自分で考えてPDCAを実践して、その成果をグループで共有して、最後に発表する…という一連の活動を通して、それぞれに成長した部分があると感じています。本来意図していた力が付いたかどうか、今後それを活かしていけるかどうかは生徒により差があるとは思いますが、一つ、間違いなく言えるのが、学校全体に勉強や学習法のことについて話していいんだ、という雰囲気ができつつあるということ。心理的安全性が担保されるというのは、大きな変化だと思っています。この取組を続けていくことでどういう効果が出るのかを引き続き検証・評価し、良くないところは改善し、私たち自身もPDCAを実践していきたいと思います」（吉柴先生）



選出された生徒2名が学年全員の前で行った全体発表会の様子。発表を見た生徒からは「（全体発表会の発表者から）学習について得られたことがあった。もっと他の生徒の発表を見る機会が欲しい」という感想・要望も聞かれた。

資料1

### 「学修状況評価に関する調査」より生徒コメント

- テストごとに記録するので、自分を客観的に見ることができ、次の計画が立てやすかった。
- 1年間を通して自分の学習法を記録し見直すことで、客観的かつ効率的に学習法をブラッシュアップできた。
- 客観的に自分の学習を見ることで、自分の強みや弱点がわかった。
- 各教科の自分に合った学習方法を見つけることができた。
- 弱点改善のためのアドバイスを先生からいただくことができて良かった。
- 学習のリズムをつかむことができた。
- 自分の時間の無駄遣いに気づけた。
- 成績が良い人の勉強方法がわかるのも良かった。
- 学習に対するさまざまな意見が聞けて良かった。
- 人前でプレゼンをするのは思ったよりも難しく、良い経験になった。
- 発表した際、客観的な視点で見ていない点が多かったことに気づいた。
- 自分の成長を客観的に感じることができた。
- これからも自分なりに学修状況評価を続けたい。

※編集部で表現を一部修正

## 成果と課題

### 仕組みを形骸化させず、発展させていくことが重要

雰囲気の変化に加え、「想定外の効果もあった」と吉柴先生は言う。それが、個人発表に向けて準備をするなかで見られた、試行錯誤する力だ。「自分が言いたいことを言語化し、資料をどうまとめてどう話したら評価者に伝わるか…という視点で考え動くことで、発表する大変さを目の当たりにし、また力も付いたと思う。ただ記録を残すだけでなくそれをアウトプットする場があることで、生徒の意識が高まった。発表という場の重要性を実感した」と吉柴先生。また、1年間の集大成としてまとめ上げたものを発表する生徒の真剣な姿は、教員の翌年に向けた意欲喚起にもつながるという。

一方、年間計画やツール（学修状況評価活動記録ノート）といった「仕組み」が確立されたことで、懸念される課題もある。石塚先生は、「この仕組みは、いわば叩き台。決まったものを前年踏襲でこなすのではなく、学年の状況などに合わせてあれこれ議論をしながらアレンジし、進化・発展させていく必要がある」と述べる。また、テーマ研究が2年次の1年間しかないため、「内容的に薄くなりがちで、単なる調べ学習で終わってしまう生徒もいることが課題」と石塚先生。「1年生のうちにSDGsのテーマに触れるなど、総合的な探究の時間について3年間を通した学習計画の見直し・改善も随時進めていきたい」と締めくくった。